

# 『時務三字経』について

大 澤 顯 浩

## 1. 江氏家塾刊本と遠東図書館蔵本

『三字経』とは王應麟の撰になるとされる宋代以来の童蒙書であるが、初等教育に広く定着した結果、後に某某三字経というようなものが種々作られた。ここで紹介する『時務三字経』もその一つである。張志公『伝統語文教育教材論—暨蒙学書目 and 書影—』（上海教育出版社、1992）に収める「蒙学書目」は、多くの啓蒙書を掲げているが、三字経に類した啓蒙書として、五、三字経の項に、

『三字孝経』	蘭湖漁夫	南京宝文書局
『地理三字経』	程思樂	乾隆六十年序本
『三字鑿』	余懋助	同治九年刊
『絵図増注歴史三字経』		北京文成堂石印

また、同じく八、以思想教育為主的韻語読物には、

『女三字経』	朱浩文	東聴雨堂刊書
『訓女三字文』	賀瑞麟	西京清麓叢書外編

といったものが挙げられている。そのほかにも同書の書影を見れば、『弟子規』（図 23）や『三字幼儀』（図 26）、『女兒経』（図 32）など、題にこそ「三字」とは明記されないものの、三字句を用いたものも少なくない。

このような啓蒙書は単に識字教育のテキストとしてつくられるものとは限らず、時代に応じて新しい内容を盛り込まれることもあり、清末には多くの洋学或いは新学にもとづくさまざまな啓蒙書が作られた。同じく、張志公「蒙学書目」五、三字経の項では、

『西学三字経』		光緒二十七年刊 <sup>1)</sup>
『時務三字経』	江翰	光緒二十八年自刊

『増続浅説時務三字経』汪恩綬 光緒三十一年醉六堂  
という三点が、新しい知識を紹介するものとして眼にとまる。

この中にみえる『時務三字経』の版式を、張志公前掲書巻末(図9、233頁)に挙げる江翰撰の光緒二十八年(1902)江氏家塾刊本『時務三字経』の書影にしたがって簡単に紹介すると、

白口単魚尾左右双辺、四行七字、断句、小字傍注、  
という体裁で、巻首の題名に続いて「旌徳江翰士屏述／門人曹成美蔚翹校刊」とある。張志公は所蔵を記さず、また今までのところ他に版本は知られていなかった。

しかし、最近になってストックホルムの東洋博物館(Östasiatiska Museet)の遠東図書館に寄託されている王立図書館所蔵の漢籍コレクションに別の一本が所蔵されていることが明らかになった。遠東図書館に寄託されているスウェーデンの王立図書館の漢籍コレクションについては以前に紹介したことがあるが、ここでは光緒癸卯(29年、1903)刊の『時務三字経』(分類記号はM1b、以下、区別する際には遠東図書館本と記す)の存在を示すにとどまり、詳しく解説を加えることはできなかった。<sup>2)</sup>このたび本稿で些かの紹介を加える所以である。遠東図書館本は線装一冊十六葉で、撰者は記されていない。版式は、

白口単魚尾四周単辺、五行九字、框高17.9cm、  
といったもので、各行に三字句を二つ記し、小字双行注がある。版心には「時務三字経」、封面には「光緒癸卯梓／時務三字経」とあるが、撰者や出版者は記されない。

## 2. 遠東図書館本の内容

遠東図書館本『時務三字経』の内容をみると、概ね以下のように分けることができる。

- a) 世界認識、b) 通商・条約、c) 近代化像、d) 清朝の疆域、e) 仇教の害、
- f) 自強の歩み、g) 光緒新政

ここでは、便宜的にそれぞれの部分を区切って、内容を簡単にまとめてみよう。

### a) 世界認識

初めに、「今の天下は五大洲あり、東と西の二つの半球にわかれる」という語句で始まり、地球説と中国の外に五大洲が東西の半球に存在するという世界認識を記す。天下（世界）には五大洲があり、亜細亜（アジア）、欧羅巴（ヨーロッパ）奥大利（オーストラリア）、阿非加（アフリカ）の四大洲は東半球にあり、美利駕（アメリカ）は南北に分けられ西半球にあって、地球の反対側で中国に向きあっている。ついで中国に及ぶが、晋末の世に五胡が競いあったが、自強を行なえば異民族を患うことはないとしている。

### b) 通商・条約

「我が中原、八十一、鄒衍の言、今実を得たり」というように、中国の広さは地球の八十一分の一であるという西洋の知識を紹介するのに、(戦国時代の)鄒衍の「大九州説」を取り上げて中国起源のものとしているのは、清末の西学中原説の一つの典型的な反応である。

それに続けて、「地球上には国が千百とあり、多くが通商して中国にも来ている」として、以下の国名を列挙する。

英吉利（イギリス）	仏蘭西（フランス）
徳意志（ドイツ）	俄羅斯（ロシア）
意大利（イタリア）	米利堅（アメリカ）
西班牙（スペイン）	比利時（ベルギー）
葡萄牙（ポルトガル）	奧地利（オーストリア） <sup>3)</sup>
日本	巴西（ブラジル）
秘魯（ペルー）	荷蘭（オランダ）
哪威（ノルウェー）	瑞典（スウェーデン）
丹馬（デンマーク）	

これらの国々はみな通商して条約があり、万国は等しく公法が立てられている。我々が加わらなければ後悔しても及ばないという。

通商を通じて条約を結んだものとして出てくる国は 17 カ国で、国名の表記など言語的に見ても興味深いものがある。清末の人の視野に入っていた外国は実質的に以上に過ぎなかったともいえ、当時植民地化されていたアジア・アフ

リカの諸国は当然記載がない。

一方、近代的な意味での外交の対象になっていなかった東アジアの諸国に対しては、後述するように朝貢国に対する伝統的な視線が維持されていた。例えば、朝鮮はどう扱われていたかといえば、d)の部分に清朝の版図に付随して、失った四つの属国の一つとして挙げられ、「外国」としては認知されていない。

### c) 近代化像

次に、「中華は道を重視し、西洋は技術を重視する」として始まる。条約を結んで通商した先にある近代化、技術の革新と殖産興業の姿が示される。即ち、報館が開かれれば見聞が明らかになり、電線が設けられれば通信が速やかになる。船舶がはしり、海浪は平らかで、鉄路が修築されて、貨車は荷を載せて軽やかにいく。鉱務は盛んになって、五金がつくられる。機器が備わって、人力が併わせられる。農民は本業に務めて、農作業に精をだす。工は器械を製造し、出荷が増える。兵は商業を防衛し、商は貨を通じる。こうして国が強くなってまた富むのだ、と近代化した姿を描いている。名は旧を守るといっても旧はどこにあらうか、旧を墨守するものは、愚かなだけだという。

### d) 清朝の疆域

「今の北京、順天府は、直隸といい古の畿輔である」という一句から始まり、山東、山西、湖南、湖北、陝西、甘肅、福建、浙江、雲南、貴州、江蘇、安徽、江西、広東、広西、河南の各省を列举し、盛京、吉林、黒竜江の東三省地区<sup>4)</sup>をあげ、さらに、チベット（前蔵、後蔵）と蒙古の帰順した藩部を記している。

そして、青海の外側には新疆が闢かれ（光緒4年）、福建の外に台湾が（光緒21年）奪われ、東は琉球（光緒5年）<sup>5)</sup>、西は緬甸（ビルマ）（光緒11年）<sup>6)</sup>、南は越南（光緒11年）<sup>7)</sup>、北は朝鮮（光緒20年）<sup>8)</sup>といった藩属国を四カ国前後して失ったが、なお国土は大きいという。これらの朝貢国はあくまでも清朝の世界秩序の枠組みに組み込まれていたために、条約、通商の対象とはなっておらず、清朝の疆域に付随するものとして扱われているにすぎない。

### e) 仇教の害

「もしも仇教したらさらに自らに害が及ぶ」といって始まり、キリスト教に関する説明を述べる。キリスト教には二種あり、天主教と耶穌教という、伝えら

れたのは明代からで天主堂が北京に残っている。道光の末に和議が成って布教が始まったが、法令をつつしんでいた。教会を攻撃することは天津から始まり、三十年して紛々と起こった。光緒 23 年には山東で騒動が起こり青島（原文では清島とあるのを改める）が開かれ、光緒 25 年には重慶で騒ぎがあり賠償が百万にものぼった。仇教をすれば賠償に費やされるのは官の銀、民の膏血である。そして、義和団（「拳匪」）が起こり滅洋に託して公使館を攻撃し反って罪を得た。連合軍が北京に入り聖駕は逃れ出て、勲戚を罪しても未だ贖うに足りない。たとえ、洋人が来ても（中国の）千人の中に（洋人の）一人がいるにすぎないのであって、我われは主であり彼らは客である。もし主が客を接待するのに奴僕が出てきて殴打すれば、奴僕が主人の意に忤り、家の規は謬ってしまう。客は一二で主は千百であり、衆が寡を欺くのは勇者が猶お怯えるようなものだ。だから、我は勧める、仇教するなかれと。小忿を忍びて、煩惱を免れん、という。

如上の図式で、（自強を図る）善き皇帝のもとにありながら、山東や重慶での仇教で青島が租借され、巨額の賠償金を支払ったことや義和団の結果、連合軍が北京に攻め込み西太后と光緒帝が逃れたことについて、仇教活動者や義和団といった一部の不逞のやからが主人の意思に反して客を害し、主人に仇をなしたというような文脈で解釈し、仇教を慎めとしている。

#### f) 自強の歩み

初めに「朝廷は上にあって自強を図ってきた、その謀を久しくしてきたことを我が詳らかにするのを聴け」という。ここでは自強という言葉はあるが、変法を意味するものではないだろう。ついで、林則徐以来の人物が挙げられている。林則徐と魏源は『海国図志』の編纂に苦心し、アロー戦争の時には恭親王と文祥が政権を支え、総理衙門を設けた。そして、曾國藩と左宗棠、沈葆楨、郭嵩燾（初代の駐英公使）らが現れて、それぞれ、船政（福州の馬尾船政局）や外交、海軍などに力を注いだが、郭嵩燾は言著を罪せられた。ついで、海外に出使した曾紀澤と薛福成が続いたが俱に早く亡くなったとしている。ここに見えるのはいずれも曾國藩の系統を引く人々で、李鴻章の名が現れないのはかえって興味深い。同治中興を導いた洋務運動が評価され、清朝体制を肯定する

内容となるのは当然ながら、西太后らに否定された変法運動への言及はなく、そのまま光緒新政へとつながっていく。

### g) 光緒新政

「今の新政は前の侮蔑を懲らして、(総理衙門を)外交部に改めて政務を議す」と始まる一段。前段の洋務運動から一貫した路線であるかのように記されて、総理衙門を外交部に改めたり、書院を学堂に改めという旧来のシステムの変革を述べ、これからの士農工商の役割を説く個所に、

将に士為らんとせば八股を捨て、経術を明らかにし時務に達す  
将に農為らんとせば樹藝に勤しみ、法は新を取れば利は五倍す  
などとあるが、「西法の善 我宜しく采るべし」という、西学に通じて技術を導入し通商を盛んにし、富強を実現することとまとめることができる。

そして末尾に、以下のように説いて締めくくる。

佳き子弟よ 此の経を誦せ  
書冊は多く 更に精を求めよ  
仇教せず 大義を明らかにし  
西学に通じて 周禮に近づかん  
西法の善 我宜しく采るべし  
鴉片の毒 我宜しく改めるべし  
言うことは浅く 理は公に則つとる  
願わくは此れを持して 蒙童に告げん

## 3. 小結

張志公前掲書の引用(25頁)によって、以下に江氏家塾本と遠東図書館本の両本を比較すると、開巻最初の二行は、

今天下 五大洲 東與西 兩半球

というもので両者に共通している。ただし、江氏家塾本は本文二行目の「兩半球」の部分に、「地形如球」という傍注が付されているが、遠東図書館本の同じ箇所には傍注も割注も付されていない。次いで、張志公の説明によると、中外の地理知識を述べた後で、

泰西人 来京師 始伝教 継通商 至本朝 愈鷗張

といい、明末のカトリックの伝来を述べているようである。つづいて中国を侵略した列国の名称を列挙して、特に宗教の装いをかぶった外国の侵略者を指弾し、その最後に

宗徒逃 教蔓延 開兵端 数百年 迄于今 禍中国 惟愚民 受其惑

といってキリスト教に対する記載をしめくくる。そして、以下に科学知識を紹介し、見たところ変法維新を宣伝し、「中学為体、西学為用」というお決まりのパターンであると評価を下している。

この江氏家塾本は実見したわけではないので、張志公の説明が時務という語をかぶせた啓蒙書に対する説明として当を得たものであるかどうかはわからない。張志公が紹介する江氏家塾本の内容は、「仇教の害」を説く遠東図書館本とはキリスト教に対する見解が全く異なっている。以上の引用箇所は遠東図書館本にはみられず、キリスト教が列強の侵略に手を貸したことが、どのような文脈で現れるのかは不明である。遠東図書館本が再々にわたって強調する外交や通商の必要性を、江氏家塾本の引用で張志公が故意に無視していないとは言い切れない。張志公が『時務三字経』を引用している部分は、もとになった張志公の著作『伝統語文教育初探』の段階で既に記されている部分であり、文革以前の1962年の出版である『伝統語文教育初探』に手を加えないで再録した箇所である。キリスト教に対する否定的な視線しか語られないのも時代の要因があるからなのだろうか。また、変法維新を宣伝しているという説明も戊戌政変後の光緒二十八年という刊行時期を考えれば些か疑問が残るだろう。遠東図書館本では洋務運動の記載はあるが、変法運動につながる記載は明らかに省かれている。

『時務三字経』も「三字経」を称するところから見れば、やはり子どもを対象とした童蒙書というべきもので、それは末尾二行の

言うことは浅く 理は公に則つとる

願わくは此れを持して 蒙童に告げん

という文言からも想定できる。全体に西学に通じて技術を導入し通商を盛んにして、富強を実現しようということを平易な言葉で述べている。その一方で、

旧中国の啓蒙書に一般的に存在していた人物故事や教訓は捨象され、地理知識というべきものも各省と藩部を列記する程度で、明代以来の類書にみられる「歴代国号歌」のような歴史知識ももはや説かれぬ。いわば、同時代の国際的な情勢に基づいて、義和団以後の清朝主導による改革（光緒新政）を宣伝する小冊子であるということができるが、本質的には中体西用論が克服されていないことは、末尾にある「西学に通じて 周禮に近づかん」とある句に読み取れるだろう。

最後に『時務三字経』原文を以下に示す。双行注は〔 〕であらわし、注文中の／は改行を示す。筆者の加えた注は（ ）で示した。なお、一部の異体字は改めた。

時務三字経

今天下	五大洲
東與西	両半球
垂細垂	欧羅巴
奧大利	阿非加〔以上四洲／為東半球〕
美利駕	分南北〔為西／半球〕
穿地心	対中国
中国興	歴有年（筆者註「歴」字避諱）
堯舜後	聖聖伝
漢治衰	积教盛
晋末世	五胡競
戎何患	在自強
外患無	国恒亡
我中原	八十一〔地球八十／一分之一〕
鄒衍言	今得実
地球上	国千百
多通商	来中国
英吉利	仏蘭西



德意志〔即布／国〕 俄羅斯  
意大利〔即義／国〕 米利堅〔即美／国〕  
西班牙〔即日斯／巴尼亞〕 比利時  
葡萄牙 奧地利〔即奧斯／馬加〕  
日日本 日巴西  
日秘魯 日荷蘭  
日哪威 日瑞典  
日丹馬 国十七  
皆通商 有条約  
万国齊 公法立  
我不入 悔莫及  
中尚道 西尚技  
技雖精 未足忌  
東西洋 最重学  
男女分 各有塾  
識字多 智慧足  
宜師法 不可失  
報館開 耳目明  
電線設 信息靈  
輪船駛 海浪平  
鐵路修 車載輕  
鉞務盛 五金生  
機器備 人力併  
農務本 樹藝精  
工製器 出貨增  
兵衛商 商通貨  
国既強 亦復富  
昔中国 大聖人  
易垂象 書求新

来百工 利用民  
逮末世 但趨文  
名守旧 旧何存  
墨守者 尚昏昏  
今北京 順天府  
曰直隸 古畿輔  
山東西〔山東／山西〕 湖南北〔湖南／湖北〕  
曰陝西 曰甘肅  
閩浙東〔福建／浙江〕 雲貴西〔雲南／貴州〕  
曰江蘇 曰安徽  
称三江 合江西  
広東西〔広東／広西〕 中河南〔河南〕  
盛吉黒〔盛京吉林／黒竜江〕 東省三  
蔵衛西〔前蔵／後蔵〕 蒙古北  
帰化久 皆藩服  
青海外 新疆關〔光緒／四年〕  
福建外 台湾界〔光緒／廿一年〕  
東琉球〔光緒／五年〕 西緬甸〔光緒／十一年〕  
南越南〔光緒／十一年〕 北朝鮮〔光緒／廿年〕  
属藩四 先後捐〔捐棄／也〕  
地雖捐 国猶大  
若仇教 還自害  
泰西教 有二途  
曰天主 曰耶穌  
教之来 始自明  
天主堂 留京城  
道光末 和議成  
准伝教 条約行  
民従教 律開禁〔同治／九年〕

慎保教 法令森  
鬧教禍 天津始  
三十年 漸紛起  
山東鬧 開清島（筆者注：青島か）〔光緒／廿三年〕  
重慶鬧 百万費〔光緒／廿五年〕  
民鬧教 官賠銀  
大百万 小千金  
官之銀 民脂膏  
財既去 禍難逃  
拳匪起 託滅洋  
攻使館 反受殃  
許與袁〔許景澄／袁昶〕 苦相諍  
兩奏稿 忠義炳  
聯軍入 聖駕出  
罪勲戚 未足贖  
洋人来 千中一  
我為主 彼為客  
主請客 奴出毆〔毆打／也〕  
奴悖主 家規謬  
客一二 主千百  
衆欺寡 勇猶怯  
我勸人 莫仇教  
忍小忿 免煩惱  
朝廷上 凶自強  
謀之久 聽我詳  
林文忠〔諱／則徐〕 魏默深〔諱／源〕  
海国志 苦用心  
識時者 恭親王〔六王／爺〕  
賢滿相 文公祥〔文文／忠公〕

同文館 訳署旁〔総理／衙門〕  
語言習 文字詳  
曾文正〔諱／国藩〕 左文襄〔諱／宗棠〕  
沈文肅〔諱／葆楨〕 郭侍郎〔即／嵩燾〕  
創船政〔左公／沈公〕 遣出洋〔曾公〕  
罪言著〔郭公〕 海軍張〔左公〕  
繼起者 曾劼剛〔諱紀澤／諡惠敏〕  
薛叔耘〔諱／福成〕 俱早亡  
今新政 懲前悔  
改外部〔由総理／衙門改〕 議政務  
洋人興 学堂多  
富出貲 貧附他  
驗照領 衣食途  
不由此 為餓夫  
今書院 改学堂  
名雖異 業毋荒  
將為士 舍八股  
明經術 達時務  
將為農 勤樹藝  
法取新 利五倍  
將為工 製造精  
能專利 海外行  
將為商 合股衆  
莫壟斷 莫欺哄  
大政教 不敢論  
謀衣食 此其近  
佳子弟 誦此經  
書冊多 更求精  
不仇教 明大義

通西学 近周禮  
西法善 我宜采  
鴉片毒 我宜改  
言之淺 理則公  
願持此 告蒙童

〔附記〕 本稿の作成にあたり、貴重な版本の調査研究の機会を与えていただいたストックホルムの東洋博物館及び遠東図書館の関係各位に対し、ここに記して深謝する。（2006.1.12）

### 注

- 1) ローマのバチカン図書館に蔵本がある。高田時雄編『梵蒂岡圖書館所藏漢籍目錄補編』（京都大学人文科学研究所東方学資料叢刊、1997）京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センターのHPの出版物（<http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/publications/index.html.ja>）のサイトにあるPDFファイルを参照。
- 2) 大澤顯浩「瑞典王立図書館の漢籍について」（『言語・文化・社会』第2号、2004）。
- 3) 原文にはオーストリア・マジャールを意味する「奧斯馬加」という割注が付されている。
- 4) 東三省が置かれたのは光緒33年（1907）のことで、『時務三字経』の刊行の時点では正式な省制はまだおかれていない。
- 5) 1879年、琉球処分。
- 6) 1885年、第3次英緬戦争により、英領インド帝国に併合された。
- 7) 1885年、清仏戦争。
- 8) 1894年、日清戦争。

時務三字經

旌德江翰士屏述

門人曹成美蔚翹校刊

今天下。五大洲。

地形如球

東與西。兩半球。

図版 江氏家塾刊本卷首

(原載、張志公『伝統語文教育教材論』上海教育出版社、1992)

## On *Shiwu Sanzijing* 時務三字經

OSAWA Akihiro

*Shiwu Sanzijing* is an elementary textbook published at the end of the Qing period. There are two editions of *Shiwu Sanzijing*. One is the edition that Zhang Zhigong 張志公 introduced in his book, published in 1902 by the School of Jiang Clan 江氏家塾. The other is the edition in the collection of the Swedish Royal Library in the Museum of Far Eastern Antiquities of Stockholm, which was compiled by an unknown author in 1903. According to the edition of the latter, it explained the damage of anti-Christian movement and the history of late Qing politics, introducing Westernization movement 洋務運動 with easy words. It seems that *Shiwu Sanzijing* was a pamphlet on the reformative politics lead by the Manchurian-Qing government after the Boxer uprising. In short *Shiwu Sanzijing* encouraged children to introduce modern technology and develop commerce in order to enrich the nation and build up its defenses.